

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著、共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(著書(欧文)) 1.				
(著書(和文)) 1. 『認知心理学ラボラトリー』第17章感情と表情—状況が変われば見え方も異なる 2. 『顔身体学ハンドブック』3-8. 対人関係と顔身体	共著 共著	2012年3月 2021年3月	弘文堂 東京大学出版会	西本武彦 編著。担当箇所 第17章 pp. 200-210 (全体概要) 本書は全20章から構成され、認知心理学分野における「感覚・知覚」「記憶・イメージ」「言語・思考・判断」「日常記憶」の4つの領域の基本的な知識を、実験を通して体系的に学ぶことを目的としたものである。 B5、総261頁 (担当部分概要) 担当ページ pp 200 - 210. 第17章では日常記憶の一つとして、対人コミュニケーション場面における表情をとりあげた。表情認知研究の基礎的知見について概説した後、他者の表情の認知が置かれた状況によって変化するという文脈効果について説明した。その上で、初学者でも着手可能な文脈効果を検証する実験パラダイムを挙げ、手続きから実験実施、結果の分析に至るまでのプロセスを丁寧に説明した。(共著者：西本武彦編著・井出野尚・上田卓司・宇根優子・川嶋健太郎・高木幸子・高橋優・田中章浩・宮澤史穂・宮脇郁・安田孝) (査読無) 河野哲也・山口真美・金沢創・渡邊克巳・田中章浩・床呂郁哉・高橋康介(編)『顔身体学ハンドブック』(総ページ464ページ)の3-8を執筆した。顔だち、表情、身体動作が、我々の対人関係に対してどのような影響を与えるのかについて、先行研究から得られたさまざまな知見に基づいて解説した。

<p>(学術論文(欧文))</p> <p>1. Multisensory Perception of the Six Basic Emotions is Modulated by Attentional Instruction and Unattended Modality</p>	<p>共著</p>	<p>2015年2月</p>	<p>Frontiers in Integrative Neuroscience 9:1 doi: 10.3389/fnint.2015.00001</p>	<p>本研究では、実験参加者に基本6感情をあらゆる視聴覚感情動画を呈示し、どちらか一方のモダリティに注意するようという有無が感情知覚に及ぼす影響を検討した。実験結果は、怒り感情の知覚は、注意に関する教示によって調整されることを示した。また、感情ごとのモダリティ優位性は、表情と音声の感情が一致している場合に生じる促進効果と、一致していない場合に生じる干渉効果の双方から説明が可能で、3つのパターンに分かれるという新たな知見を得た。(共著者: <u>Sachiko TAKAGI</u>・Saori HIRAMATSU・Ken-ichi TABELI・Akihiro TANAKA; 共同研究につき本人担当部分抽出不可能) (査読有)</p>
<p>2. Comparison of Multisensory Display Rules in Expressing Complex Emotions between Cultures</p>	<p>共著</p>	<p>2015年9月</p>	<p>Proceedings of the International Conference on Auditory-Visual Speech Processing 2015、 pp. 57-62</p>	<p>本研究では、日本人とオランダ人を対象とし、軽蔑や嫉妬といった高次感情の多感覚的表現とその文化差を明らかにすることを目的に、顔と声を組み合わせて高次感情を表す視聴覚動画を作成する実験を行った。結果を日蘭で比較したところ、高次感情の通文化的側面と文化依存的側面の両方が示された。前者は、興味は驚き表現と類似性が高いという点であった。また、後者は、軽蔑と嫉妬は、日本人では怒りと、オランダ人では喜びと表現の類似性が高いという点であった。(共著者: <u>Sachiko Takagi</u>・Shiho Miyazawa・Elisabeth Huis In 't Veld・Beatrice de Gelder・Akihiro Tanaka; 共同研究につき本人担当部分抽出不可能) (査読有)</p>
<p>3. Towards the Development of Facial and Vocal Expression Database in East Asian and Western Cultures</p>	<p>共著</p>	<p>2015年9月</p>	<p>Proceedings of the International Conference on Auditory-Visual Speech Processing 2015、 pp. 63-66</p>	<p>感情の視聴覚統合について検討するため、日本人とオランダ人が顔と声で基本6感情を表現した動画による刺激セットを作成し、顔と声それぞれに関する評価実験を行った。分析結果から、日本人は恐怖表情を表情ではなく音声を手がかりに知覚する傾向があり、またオランダ人よりも音声からの感情の読み取りに長けていることが示唆された。また、日本人と比較してオランダ人の顔からの感情知覚の正答率が高いことが示唆された。(共著者: Akihiro Tanaka・<u>Sachiko Takagi</u>・Saori Hiramatsu・Elisabeth Huis In 't Veld・Beatrice de Gelder; 共同研究につき本人担当部分抽出不可能) (査読有)</p>

<p>(学術論文(和文))</p> <p>1. 採用面接場面における顔表情と対人不安の関係性</p>	<p>単著</p>	<p>2009年10月</p>	<p>日本顔学会誌 第9巻 第1号 pp. 43-52</p>	<p>コミュニケーションにおける表情を検討するため、擬似的な採用面接場面を用いた実験的検討を行った。実験では、面接者の表情と志願者の対人不安傾向が、志願者自身の印象や採用見込みに与える印象を検討した。分析の結果、面接者の肯定的な表情の影響は強く、対人不安の高低による差が顕著に見られた。特に、対人不安傾向の高い者は、面接者に対して良い印象を与えられたと誤っていても、結果としては不採用になるという予測を立て易い傾向にあった。 (査読有)</p>
<p>2. 採用面接場面における評価者間の一致度—面接者の肯定的表情の呈示比率と志願者の対人不安からの検討—</p>	<p>共著</p>	<p>2010年9月</p>	<p>日本顔学会誌 第10巻 第1号 pp. 73-86</p>	<p>擬似的な採用面接場面を用いた実験を行い、採用面接場面における志願者への第三者評価に、面接者の表情と志願者の対人不安傾向が及ぼす影響について検討した。分析の結果、各志願者に対する第三者による評価の一致度は、対人不安の高低によって差が生じていた。第三者による評価は、対人不安の高い者に対する一致度が高いことが示唆された。一方、対人不安が低い者に対する一致度は低かった。(共著者：高木幸子・西本武彦；共同研究につき本人担当部分抽出不可能) (査読有)</p>
<p>3. 日本人の顔と声による感情表現の収録とその評価</p>	<p>共著</p>	<p>2011年11月</p>	<p>電子情報通信学会技術研究報告 HIP2011-50 pp. 51-56</p>	<p>本研究では、日本人が顔と声で基本6感情を表現した動画による刺激セットの作成、およびその評価から日本人の感情知覚の傾向に言及した。動画の収録詳細を説明し、収録した動画についての感情評価に関する分析を行った。結果、日本人は恐怖感情の主観的評価が非常に少なく、また感情表現そのものも不得手である可能性が示唆された。さらに、恐怖感情は表情よりも音声からの方が知覚しやすいという特異な傾向があることが示唆された。(共著者：高木幸子・平松沙織・田中章浩；共同研究につき本人担当部分抽出不可能) (査読無)</p>

<p>4. 顔と声のあらわす感情が不一致な刺激に対する感情判断および印象評定</p>	<p>共著</p>	<p>2012年2月</p>	<p>日本音響学会聴覚研究会資料 第42巻 pp. 87-92</p>	<p>感情の視聴覚統合に焦点をあてた研究を行った。本研究では、人工的な刺激と非人工的な刺激から知覚される感情に着目して、刺激の生態学的妥当性を確認した上で、その傾向について検討した。結果、知覚される感情は、口の動きと発話のずれに注意して作成された人工的な刺激であれば概ね同様の傾向を持ち、非人工的な刺激を用いて得られた視聴覚統合に関する知見は有益であることが示唆された。(共著者：高木幸子・田部井賢一・田中章浩；共同研究につき本人担当部分抽出不可能) (査読無)</p>
<p>5. 表情と音声の情動価を不一致にした刺激に対する情動判断—基本6感情を用いた日蘭比較研究—</p>	<p>共著</p>	<p>2012年11月</p>	<p>電子情報通信学会技術研究報告 HIP2012-50 pp. 13-16</p>	<p>本研究では、視聴覚情動知覚について、モダリティ優位性の傾向に文化差がみられるのかを検討した。基本6感情を表現した動画をもとに、表出された表情と音声の情動価の組合せを入れ替えた刺激を用いた実験を行った。その結果、全体的傾向として、オランダ人と比較して日本人に音声知覚優位がみられ、日本人と比較してオランダ人に表情知覚優位が示された。また、特に視聴覚情報を同時呈示した場合には、情動の種類によって日蘭での回答傾向が顕著に異なることが示された。(共著者：田部井賢一・高木幸子・田中章浩；共同研究につき本人担当部分抽出不可能) (査読無)</p>
<p>6. 基本6感情の組合せによる高次感情の検討</p>	<p>共著</p>	<p>2013年3月</p>	<p>電子情報通信学会技術研究報告 HCS2012-104 pp. 149-154</p>	<p>本研究では、複雑な高次感情について概念構造と、認知および表出の2つの側面から検討を行った。研究1では質問紙を用い、高次感情にどの程度基本6感情が含まれているかを、それぞれ7段階で回答させた。研究2では参加者は、基本6感情を表現した表情と音声を組み合わせ、指定された感情を最も適切に表現する発話動画を作成することを求められた。本研究の結果は、少なくとも一部の高次感情は、基本6感情の組み合わせから説明されることを明らかにした。 (共著者：宮澤史穂・高木幸子・田中章浩；共同研究につき本人担当部分抽出不可能) (査読無)</p>

7. 表情と音声の示す感情が一致していない刺激からの感情知覚—異文化バーチャル・リアリティ・コミュニケーションへの応用—	共著	2013年9月	基礎心理学研究 第32巻(第1号) pp. 29-39	本研究では、顔と声が示す感情が一致していない刺激から知覚される感情と、受け手と送り手の文化的背景の組み合わせが感情知覚に及ぼす影響を検討することを目的に、演技の段階で意図せずして顔と声に異なる感情が表出された刺激を用いて、日蘭比較実験を行った。実験の結果、感情の視聴覚統合において日蘭で文化差がみられた。特に、一般的には感情知覚の手がかりとして声よりも顔から得られる情報が優位だが、日本人では声の影響も強く受けることが示唆された。(共著者：高木幸子・田部井賢一・Huis In 't Veld Lisanne・de Gelder Beatrice・田中章浩；共同研究につき本人担当部分抽出不可能) (査読有)
8. 表情と音声に同時に感情を含めた動画刺激に対する感情知覚	共著	2014年9月	認知科学 第21巻 pp. 344-362	本研究では、日本人による表情と音声に同時に感情を含めた視聴覚感情動画刺激を収録し、それらの刺激を表情と音声で単独で呈示した場合に知覚される感情の傾向について検討した。実験の結果、欧米では基本6感情すべてにおいて音声より表情の正答率が高いものの、日本人は恐怖の感情のみ音声の正答率が高かった。また、同一の感情を同時に表情と音声に含めたつもりでも、それらを単独で呈示した場合には異なる感情として知覚される傾向がみられた。(共著者：高木幸子・平松沙織・田中章浩；共同研究につき本人担当部分抽出不可能) (査読有)
9. 顔と声による情動判断における文化差を生み出す神経基盤	共著	2015年7月	電子情報通信学会技術研究報告 HIP2015-45 pp. 83-88	本研究の目的は、動画刺激を日本実験参加者とオランダ人実験参加者に視聴覚呈示して情動判断時の脳活動をfMRIで計測する実験を実施し、視聴覚情動判断の際の神経基盤での文化差を検討することであった。行動データでは、オランダ人は日本人と比べて顔への依存性が高いという文化差がみられた。脳画像データでは、日本人よりもオランダ人では顔への依存性が高いという傾向はRt FFAと、ACCといった高次処理を担う領域の活動の差から生じる可能性が示唆された。(共著者：高木幸子・原田宗子・定藤規弘・Huis In 't Veld Elisabeth・de Gelder Beatrice・濱野友希・田部井賢一・田中章浩；共同研究につき本人担当部分抽出不可能) (査読無)

10. 会話の理解を促進する表情と注視位置の検討	共著	2015年7月	電子情報通信学会技術研究報告 HIP2015-45 pp. 19-24	本研究では、対面での会話時の内容理解における発話者の表情と観察者の視線の影響を検討した。実験では発話者が短い説明的文章を怒り・喜び・中立の表情で読み上げる動画を呈示し、参加者には顔全体を見る条件・目元を注視する条件・口元を注視する条件で発話内容を理解するように求めた。その結果、発話者が喜び顔でかつ観察者が口元を注視した場合に文章理解が促進された。音声のみを呈示した場合には、音声に含まれる感情は理解に影響しなかった。（共著者：高橋麻衣子・高木幸子・田中章浩；共同研究につき本人担当部分抽出不可能） (査読無)
11. 社会的文脈に沿った表情と音声による感情表現とその評価	共著	2017年3月	電子情報通信学会技術研究報告 HCS2016-101 pp. 61-66	本研究では、高次感情と社会的文脈に焦点を当て、表情と音声の示す感情情報の快の程度の差が、最終的な送り手の感情状態の快度判断および受け手に対する好意度判断に及ぼす相互的な影響を検討した。実験の結果、送り手の快度および好意度は、表情単独からは判断できないものの、音声単独からは判断できることが示された。また、相互の影響は加算的に影響しあうことが明らかになった。（共著者：高木幸子・田中章浩；共同研究につき本人担当部分抽出不可能） (査読無)
12. 共感性が表情と音声による高次感情判断に及ぼす影響	単著	2017年10月	電子情報通信学会技術研究報告 HCS2017-61 pp. 9-14	本研究の目的は、送り手によって表情と音声で一致あるいは不一致な高次感情情報が表出された場合に、受け手による感情判断と受け手自身の感情的反応に、受け手の共感性が及ぼす影響を、実験によって検討することであった。実験の結果、表情と音声による高次感情表現に基づく感情判断は、受け手の個人内要因である共感性のうち視点取得と被影響性の程度によって差がみられる可能性が示唆された。 (査読無)

13. 人物の印象形成に顔と声が及ぼす影響—既存情報の印象に基づく未知情報の具体的推測—	共著	2018年3月	電子情報通信学会技術研究報告 HCS2017-93 pp. 29-34	本研究の目的は、特定人物の顔と声という既存手がかり情報から形成された印象に基づいて、その人物に関する未知情報を推測する場合、推測内容が評価間で一致する傾向および各既存手がかり情報の重みづけの2点について実験的に検証することであった。実験結果から、推測内容は評価者間で一致する傾向が高く、顔もしくは声どちらか一方の印象に依拠して推測がなされるという知見が得られた。（共著者：渡辺風沙・高木幸子；共同研究につき本人担当部分抽出不可能） (査読無)
14. 日本語修辭疑問文における対格WH語の指示性—統語構造に基づく韻律構造の予測—	共著	2018年3月	電子情報通信学会技術研究報告 HCS2017-93 pp. 101-106	本研究は心理学と言語学の共同研究である。言語学における議論から、対格WH語の「何を」を伴う修辭疑問文では、当該WH語の指示的解釈と非指示的解釈の間で意味解釈上の曖昧性が観察される。本稿では、これら2つの解釈を統語構造から概観し、これに基づく韻律構造に関する予測を立てた。本研究を通じて、日本語では文末イントネーション以外の音声情報が統語構造の識別に関与するということが明らかになった。（共著者：坂本暁彦・高木幸子；共同研究につき本人担当部分抽出不可能） (査読無)
15. 日本語修辭疑問文における対格WH語の指示性—音声聴取実験による二種類の統語構造の検証—	共著	2018年5月	電子情報通信学会技術研究報告 HCS2018-12 pp. 83-88	本稿は、心理学と言語学の共同研究である。対格WH語を伴う疑問文における2種類の意味解釈について、言語学領域における統語構造から韻律構造を予測し、この予測に関して内省判断と心理実験による量的判断からアプローチした。実験では、予測を踏襲した音声を収録して呈示し、当該の予測が量的にも妥当であることが示された。（共著者：高木幸子・坂本暁彦；共同研究につき本人担当部分抽出不可能） (査読無)
16. 強度の異なる表情から解読される感情の日中比較	共著	2018年12月	日本顔学会誌 第18巻第2号 pp. 61-72	本研究では、本研究では、日本人の解読規則の特徴として強調性と不適合感情優先性があることを予測し、表情静止画から基本6感情それぞれを同時に読み取る調査を実施した。調査の結果、文化によらず、表情強度が弱い表情よりも強い表情に対して表情と一致する感情が高く評価された。さらに、中国人と比較して日本人は、表情と一致する感情および一致しない感情の両方をより高く評価することが明らかになった。これらの結果から、2つの予測は妥当であることが示唆された。（共著者：高木幸子・陶虹宇・松本芳之；共同研究につき本人担当部分抽出不可能） (査読有)

17. 顔の部分特徴知覚における布置情報の影響	共著	2018年12月	日本顔学会誌 第18巻第2号 pp. 47-59	顔の知覚では、目や口など部分特徴の全体的な配置（布置情報）に関する処理である全体処理が重要なことが示されてきた。本研究では、部分特徴の知覚は布置情報の影響を受けるかどうか検討することを目的とし、3つの実験を通して検討を試みた。実験結果から、部分特徴の知覚は布置情報の影響を受けること、我々は部分特徴の情報と布置情報の両方を顔の識別に利用していること、の2つが示された。（共著者：安田孝・高木幸子；共同研究につき本人担当部分抽出不可能） （査読有）
18. スマートスピーカーによるフィラーとポーズを伴う返答に対するアニメシー知覚	共著	2019年3月	電子情報通信学会技術研究報告 118 (487) pp. 87-92	本研究は、AIの返答を操作し、返答における挿入内容（フィラー・ポーズ）、およびそれらの挿入頻度（複数・単数）が、ヒトがスマートスピーカーに対して抱くアニメシーや利便性、会話の自然さに与える影響を検討することを目的とした。実験の結果、他の条件と比較して、AIの返答に単数回のフィラーを挿入することはアニメシー知覚を増加させるものの、利便性や会話の自然さの評価を減少させることが明らかになった。一方、フィラーを複数回挿入した場合には、すべての指標において評価が減少することが示唆された。（共著者：檜山貴義・高木幸子・坂本暁彦；共同研究につき本人担当部分抽出不可能） （査読無）
19. 韻律と視線が指示性解釈に及ぼす影響－対格WH語を伴う日本語修辭疑問文を用いた検討－	共著	2019年5月	電子情報通信学会技術研究報告 HCS2019-1 HIP2019-1 pp. 81-86	対格WH語を伴う修辭疑問文では、その韻律構造において、非難の焦点が対象物へと向かう指示的解釈ではWH語に、非難の焦点が行為そのものへと向かう非指示的解釈では動詞に強調アクセントが置かれる。本研究ではさらに、上記の統語・韻律構造から導かれる音声情報と視線を同時呈示した場合の、聞き手による指示性解釈の変化を実験によって検証した。実験結果は、一般的には視覚情報の方が判断において優位とされるものの、指示性解釈の場合には音声情報が重要であった。（共著者：高木幸子・坂本暁彦；共同研究につき本人担当部分抽出不可能） （査読無）

20. LINEスタンプがもたらす感情伝達促進効果がチャットコミュニケーションに与える影響	共著	2020年3月	電子情報通信学会技術研究報告、119(447)、 pp. 7-12	本研究は、チャット場面における感情伝達で、エモティコンの種類（顔文字、絵文字、LINEスタンプ）による伝達効果の差異を検証することを目的とした。伝達する感情は喜び、悲しみ、怒り、不安の4つを設定した。分析の結果、エモティコンの付加が、メッセージの感情伝達を促進することが示された。また、喜びと怒りの感情では、LINEスタンプは顔文字や絵文字に比べてより促進するという、エモティコンによる効果の差異が示唆された。（共同報告者：安田孝・高木幸子；共同研究につき本人担当部分抽出不可能） (査読無)
21. ナント型感嘆文ー不変化詞「の」の生起に関する質的・量的検証ー	共著	2020年5月	電子情報通信学会技術研究報告（信学技報） 120(16)、pp. 25-30	名詞要素が現れるタイプのナント型感嘆文（以下、名詞タイプ）では、不変化詞「の」の生起が随意的であることが指摘されている（例えば、「なんて論文（なの）だ」）。統語論を背景とした研究では、一般に、節を名詞化する要素という意味で「の」が名詞化辞とされる。名詞タイプは、実質名詞（上記の例では「論文」）が生起することで節がすでに名詞化されていると考えられるため、名詞化辞分析のもとでは、随意的とは言え、「の」がなぜ生起可能なのかについては不明なままである。一方で、不変化詞「の」をある種のモダリティ要素として見なす意味・語用論的な研究として五十嵐（2015）があるが、そこでは「の」が意外性マーカーとして分析されている。本研究では、この意外性分析に沿って、名詞タイプにおける「の」の生起に関するふるまいを実験と調査に基づき説明する。（共同報告者：坂本暁彦・高木幸子；共同研究につき本人担当部分抽出不可能） (査読無)
22. 職場におけるフリーライダー問題ー初対面時の印象とその判断ー	共著	2021年3月	電子情報通信学会技術研究報告 120(432) pp. 91-96	本研究は、こうした状況に鑑み、職場におけるフリーライダーに焦点を当てた。具体的には、日常的な会話からフリーライダーを見抜くことはできるのか、フリーライダーの存在および自身のフリーライダー傾向が共同作業におけるメンバー選択にどのような影響を及ぼすのかを検討した。（共同報告者：小松崎航・高木彩子；共同研究につき本人担当部分抽出不可能）

<p>23. オンライン採用面接における自己像が志願者に及ぼす影響の予備的検討</p>	<p>共著</p>	<p>2021年5月</p>	<p>電子情報通信学会技術研究報告121(37)</p>	<p>本研究は、オンライン採用面接において、画面に表示される志願者自身の顔（自己像）が、志願者自身にどのような影響を及ぼすか、検討することを目的として、その予備的検討を行う。実験では、実験参加者が志願者、実験者が面接官になり、模擬的なオンライン採用面接を実施する。その際、自己像のフィードバックの有無を要因として、(1) 自己フィードバックなし条件、(2) 自己フィードバックあり・サイズ小条件、(3) 自己フィードバックあり・サイズ大条件、の3条件を設定する。実験後に実験参加者に質問紙への記入を求め、自己像の有無によって実験参加者の面接に対する自己評価などにどのような影響を及ぼすか、検討した。（共著者：高木 幸子・伊藤博晃・安田 孝・渡邊 伸行；共同研究につき本人担当部分抽出不可能）</p>
<p>24. エモティコンとしてのLINEスタンプが持つ感情伝達効果【査読有】</p>	<p>共著</p>	<p>2021年12月</p>	<p>日本顔学会誌21(2)</p>	<p>本研究は、チャット場面における感情伝達で、付加するエモティコンの種類（顔文字、絵文字、LINEスタンプ）による伝達効果の差異を検証することを目的とした。伝達する感情は喜び、悲しみ、怒り、不安の4つを設定し、チャット場面でのどの程度感情が伝わるかを2つの実験により検討した。実験1では、エモティコンを用いることで感情伝達はより促進されるという仮説と、エモティコンにより感情伝達の効果が異なる可能性があり、スタンプは其中最も感情伝達に有効なエモティコンである、という2つの仮説を検証した。実験1の結果は、第1の仮説は支持したが、第2の仮説については一部の感情において成立しなかった。実験2は、第1の仮説が、LINEスタンプの付加が情報の繰り返しによる強調の効果なのか、それともエモティコンに特有の感情伝達効果があるのかを検証した。その結果、同じメッセージを2回繰り返した場合とは異なり、LINEスタンプにはエモティコン特有の感情伝達効果が存在することが確認された。エモティコンを用いた感情伝達の効果について、情動伝達における覚醒度と表示規則の観点から考察を行った（共著者：安田孝・高木 幸子；共同研究につき本人担当部分抽出不可能）</p>

25. 衛生マスクとサングラスの着用が顔の魅力度の推測に及ぼす影響	共著	2022年3月	電子情報通信学会技術研究報告121(438)	<p>本研究の目的は、マスクによって顔の口元情報が隠れている場合と、サングラスによって顔の目元情報が隠れている場合に予測される顔の魅力度は、もともとの顔の魅力度と比較してどのように変化するかを検討することであった。実験では、男女各4名(計8名)のオリジナル顔画像と、オリジナル顔画像からマスクで口元を隠した画像と、サングラスで目元を隠した画像を作成して刺激として実験参加者に呈示し、単項目5件法で顔の魅力度について回答することを求めた。得られたデータに関して2要因(第1要因:モデルの性別(男性・女性);第2要因:条件(マスク条件・サングラス条件・オリジナル条件))の分散分析を実施した。分析の結果、男性モデルの場合のみ、サングラス条件およびオリジナル条件と比較して、マスク条件において推測される魅力度が高いことが示された。この結果から、男性の場合のみ、マスクを外した場合とサングラスをしている場合よりもマスクを着用している場合の方が顔の魅力度が高く評価されることが示された。(共著者:杉本浩一・安田孝・高木 幸子;共同研究につき本人担当部分抽出不可能)</p>
26. オンライン採用面接における発話内容と人事評価に関するテキストマイニングを用いた検討	共著	2022年5月	電子情報通信学会技術研究報告 122(23)1-6	<p>本研究では、オンライン採用面接において志願者が表出する様々な情報のうち発話内容に着目し、人事評価の高低に基づくそれぞれの発話内容の特徴についてテキストマイニングを通じて検討した。テキストマイニングの結果得られた頻出語リストおよび共起ネットワークから、高評価者と比較して低評価者は、質問に対する回答において抽象的な語とフィルターの頻出度が高く、これによって発話内容が具体性に欠ける傾向にあることが示唆された。(共著:高木幸子・伊藤博晃・安田孝・渡邊伸行;共同研究につき本人担当部分抽出不可能)</p>

<p>27. ナント型感嘆文ー不変化詞「の」の有無が快感評価に与える影響ー</p>	<p>共著</p>	<p>2023年1月</p>	<p>電子情報通信学会技術研究報告 122(349) 102-107</p>	<p>驚き感情の表出に特化した日本語表現の一つにナント型感嘆文がある。当該表現の名詞タイプでは、不変化詞「の」の生起が随意的となることが指摘されている。坂本・高木(2020)では、五十嵐(2015)で提案された意外性分析に基づき、名詞タイプに「の」が生起する場合、話し手による意外性判断を伴った驚き感情が表出されるという仮説を立て、文脈を固定せず「の」の生起の有無にのみ焦点を当てた実験によりそれを検証した。本研究ではさらに、文脈を固定し、かつ、「の」の生起の有無が異なる刺激文を対呈する発話文解釈調査を通して当該仮説の妥当性を検証した。(共著：坂本暁彦・高木幸子；共同研究につき本人担当部分抽出不可能)</p>
<p>28. 男性の求心顔および遠心顔の印象ーメイクと写真加工による比較ー【査読有】</p>	<p>共著</p>	<p>2023年3月</p>	<p>容装心理学研究 第2巻 1号, 1-13</p>	<p>本研究では、パーツの求心化・遠心化という女性のメイク技術に着目し、男性におけるこの2種のメイクによる印象変化の有無、その印象変化のメイクと写真加工による違い、および印象変化の方向性、の3点を検証した。分析の結果、求心化と遠心化はともに印象変化をもたらす、その傾向はメイクと写真加工で異なることが示された。特に、知的さの評価は、メイクでは求心化で高まるものの、写真加工では遠心化で高まるという、対照的な効果が見られた。また、メイクによる求心化がもたらす印象変化は、女性顔における一般的知見と同等であることが示された。(共著：高木幸子・安田孝；共同研究につき本人担当部分抽出不可能)</p>
<p>(紀要論文) 1 コミュニケーションにおける表情および身体動作の役割</p>	<p>単著</p>	<p>2006年2月</p>	<p>早稲田大学文学研究科紀要 第51巻 pp. 25-36</p>	<p>本稿ではコミュニケーションにおける非言語的情報の重要性について概観し、特にコミュニケーションにおける表情の役割についてまとめた。結論として、表情は他の非言語的情報と共に用いられることによってより多くの情報を含むようになること、非言語的情報の個々の繋がりを検討したうえで、さらには他分野のさまざまな技術の応用とその統合についての研究が重要であることを報告した。(査読無)</p>

<p>2. 氏への親密度が対人関係における互惠性に及ぼす影響</p>	<p>単著</p>	<p>2017年9月</p>	<p>人間科学 第35巻 pp. 1-9</p>	<p>本稿では、夫婦別姓制度を視野に、最後通告ゲームを用いた実験を行い、氏への親密度が対人関係における互惠行動の増減に及ぼす影響について論じた。実験の結果は、異なる親密度の氏を持つ提案者による分配案を、回答者である実験参加者が受け入れるか否かは、氏への親密度の影響を受けないことが示された。つまり、氏の同異は互惠的行動の増減には結びつかない傾向が示唆された。(査読無)</p>
<p>3. 新聞投書欄における選択的夫婦別姓に対する意見の分析—KH Coderによるテキストマイニングを用いた検討—</p>	<p>単著</p>	<p>2019年9月</p>	<p>人間科学 第37巻 pp. 45-62</p>	<p>本稿では、夫婦別姓制度に関する世論の推移とその論点について、新聞書面における投書欄の一般意見をテキストマイニングによって分析することによって整理した。具体的には、朝日新聞・毎日新聞・産経新聞・読売新聞における1989年から2019年までの全220記事について、KH-Coderを用いて分析した。分析の結果、世論は新聞報道のニューズフレームの影響を色濃く受けるとともに、これまでのリベラル対保守の構図を超え、近年では民法750条が違憲か否かに論点がシフトしていることが明らかになった。(査読無)</p>
<p>(辞書・翻訳書等) 1.</p>				
<p>(報告書・会報等) 1. 心理学者による脳科学研究のリアル</p>	<p>単著</p>	<p>2016年4月</p>	<p>心理学ワールド73号 pp. 13-16</p>	<p>本稿は、心理学ワールド73号『脳科学と心理学(1) 幸せな相乗効果を求めて』への寄稿原稿であり、心理学を専門とする研究者が神経生理学領域と学際研究を行う際の注意点および寄与できる点について、筆者なりの視点から論じたものである。特に、心理学者がfMRIの解析を行う際の苦勞、注意点、結果の解釈および考察において留意しなければならない点について詳細に述べた。また、最後に、心理学者としてこうした領域で貢献するためには何が必要だと考えられるかについて筆者なりの見解を述べた。(査読無・招待原稿)</p>

<p>(国際学会発表)</p> <p>1. A prospect on recognition of emotions using a technological method to feedback the amount of changes in facial expression</p>	<p>共同</p>	<p>2003年9月</p>	<p>The 10th European Conference on Facial Expression (Rimini, Italy)</p>	<p>本研究では、CGアニメーション人物とシナリオに沿ったコミュニケーションを行う実験を実施し、対話場面における表情種の影響が意思疎通の程度と満足度に与える影響を検討した。実験では、被験者がシナリオに合わせて呈示した表情に対して、CGアニメーション人物から positive/negativeの表情がフィードバックされた。実験の結果、被験者の呈示した表情とフィードバックされた表情の種類が一致している場合に、意思疎通の程度と満足度が高まることが示唆された。(共同報告者：Sachiko Takagi・Tsunemi Tokuhara; 共同研究につき本人担当部分抽出不可能)</p>
<p>2. The role and presumption of facial expression in communicative acts</p>	<p>共同</p>	<p>2005年9月</p>	<p>The 11th European Conference on Facial Expression (Dahram, England)</p>	<p>本研究は、シナリオに沿ってCGアニメーション人物とコミュニケーションを行う実験を通して、他者感情の推測の指針となる表情の役割を検討することを目的とした。実験で使用したシナリオには、喜び・怒り・悲しみ・驚きを表現する場面が含まれていた。実験の結果、感情の種類によらず、他者感情の推測においてはシナリオの言語的情報よりも、CGアニメーション人物の表情という非言語的情報の影響が強いことが示唆された。(共同報告者：Sachiko Takagi・Atsushi Tokunaga; 共同研究につき本人担当部分抽出不可能)</p>
<p>3. Recording and validation of audiovisual expressions by faces and voices</p>	<p>共同</p>	<p>2011年10月</p>	<p>The 12th International Multisensory Research Forum (Hakata, Fukuoka)</p>	<p>感情の視聴覚統合について検討するため、日本人とオランダ人が顔と声で基本6感情を表現した動画による刺激セットを作成し、顔と声それぞれに関する評価実験を行った。評価実験については、日本人とオランダ人の感情知覚傾向に関する比較検討も実施した。分析結果から、日本人は恐怖表情を表情ではなく音声を手がかりに知覚する傾向があり、またオランダ人よりも音声からの感情の読み取りに長けていることが示唆された。また、日本人と比較してオランダ人の顔からの感情知覚の正答率が高いことが示唆された。(共同報告者：Sachiko Takagi・Saori Hiramatsu・E. M. J. Huis in 't Veld・Beatrice de Gelder・Akihiro Tanaka; 共同研究につき本人担当部分抽出不可能)</p>

4. The cultural differences in multisensory display rules in expressing the complex emotions	共同	2013年8月	The 9th International Conference on Cognitive Science (Kuching, Malaysia)	本研究では、日本人とオランダ人を対象とし、軽蔑や嫉妬といった高次感情の多感覚的表現とその文化差を明らかにすることを目的に、顔と声を組み合わせて高次感情を表す視聴覚動画を作成する実験をおこなった。結果を日蘭で比較したところ、高次感情の通文化的側面と文化依存的側面の両方が示された。前者は、興味は驚き表現と類似性が高い点であった。また、後者は、軽蔑と嫉妬は、日本人では怒りと、オランダ人では喜びと表現の類似性が高い点であった。（共同報告者： Sachiko Takagi ・ Shiho Miyazawa ・ Elisabeth Huis In 't Veld ・ Beatrice de Gelder ・ Akihiro Tanaka ；共同研究につき本人担当部分抽出不可能）
5. Cultural differences in emotion perception by face and voice representing basic six emotions	共同	2014年6月	The 15th International Multisensory Research Forum (Amsterdam, The Netherlands)	本研究では、視聴覚情動知覚について、モダリティ優位性の傾向に文化差がみられるのかを検討した。基本6感情を表現した動画をもとに、表出された表情と音声の情動価の組合せを入れ替えた刺激を用いた実験をおこなった。その結果、全体的傾向として、オランダ人と比較して日本人に音声知覚優位がみられ、日本人と比較してオランダ人に表情知覚優位が示された。また、特に視聴覚情報を同時呈示した場合には、情動の種類によって日蘭での回答傾向が顕著に異なることが示された。（共同報告者： Akihiro Tanaka ・ Sachiko Takagi ・ Ken-ichi Tabei ；共同研究につき本人担当部分抽出不可能）
6. Comparison of Emotion Perception between artificial and non-artificial stimuli representing different emotions by faces and voices	共同	2014年6月	The 15th International Multisensory Research Forum (Amsterdam, The Netherlands)	感情の視聴覚統合に焦点をあてた研究を行った。こうした研究では、各モダリティの示す感情を人工的に組み合わせた刺激を用いることが多かった。本研究では人工的な刺激と非人工的な刺激から知覚される感情に着目して、刺激の生態学的妥当性を確認した上で、その傾向について検討した。結果、知覚される感情は、口の動きと発話のずれに注意して作成された人工的な刺激であれば概ね同様の傾向を持ち、非人工的な刺激を用いて得られた視聴覚統合に関する知見は有益であることが示唆された。（共同報告者： Sachiko TAKAGI ・ Ken-ichi TABEI ・ Akihiro TANAKA ；共同研究につき本人担当部分抽出不可能）

7. The Neural Basis of Cultural Differences in Emotion Perception	共同	2015年6月	The 16th International Multisensory Research Forum (Pisa, Italy)	本発表では、感情判断における視聴覚統合の文化差が、行動レベルではなく神経基盤レベルでも生じるかを検証するために実施したfMRI実験の結果について論じ、オランダ人の視覚野の活動の強さがこうした文化差を生じさせる可能性を示唆した。(共同報告者：Sachiko Takagi・Tokiko Harada・Norihiro Sadato・Elisabeth Huis In 't Veld・Beatrice de Gelder・Yuki Hamano・Ken-ichi Tabei・Akihiro Tanaka；共同研究につき本人担当部分抽出不可能)
8. Comparison of Multisensory Display Rules in Expressing Complex Emotions between Cultures 【再掲】	共同	2015年9月	The International Conference on Auditory-Visual Speech Processing 2015 (Vienna, Austria)	本研究では、日本人とオランダ人を対象とし、軽蔑や嫉妬といった高次感情の多感覚的表現とその文化差を明らかにすることを目的に、顔と声を組み合わせて高次感情を表す視聴覚動画を作成する実験を行った。結果を日蘭で比較したところ、高次感情の通文化的側面と文化依存的側面の両方が示された。前者は、興味は驚き表現と類似性が高いという点であった。また、後者は、軽蔑と嫉妬は、日本人では怒りと、オランダ人では喜びと表現の類似性が高いという点であった。(共同報告者：Sachiko Takagi・Shiho Miyazawa・Elisabeth Huis In 't Veld・Beatrice de Gelder・Akihiro Tanaka；共同研究につき本人担当部分抽出不可能)
9. Towards the Development of Facial and Vocal Expression Database in East Asian and Western Cultures 【再掲】	共同	2015年9月	The International Conference on Auditory-Visual Speech Processing 2015 (Vienna, Austria)	感情の視聴覚統合について検討するため、日本人とオランダ人が顔と声で基本6感情を表現した動画による刺激セットを作成し、顔と声それぞれに関する評価実験を行った。分析結果から、日本人は恐怖表情を表情ではなく音声を手がかりに知覚する傾向があり、またオランダ人よりも音声からの感情の読み取りに長けていることが示唆された。また、日本人と比較してオランダ人の顔からの感情知覚の正答率が高いことが示唆された。(共同報告者：Akihiro Tanaka・Sachiko Takagi・Saori Hiramatsu・Elisabeth Huis In 't Veld・Beatrice de Gelder；共同研究につき本人担当部分抽出不可能)

<p>10. Cultural Differences and its Neural Basis Differences in Emotion Perception from Facial and Vocal Expression</p>	<p>共同</p>	<p>2016年7月</p>	<p>The 31st International Congress of Psychology (パシフィコ横浜)</p>	<p>本発表は、シンポジウムの一環としてなされたものであり、表情と音声に基づく感情判断における文化差について、行動実験だけではなくfMRIを用いた神経基盤の検討を行う際の実験パラダイムとその結果解釈について論じた。特に、fMRIの撮像において音声を扱う場合の注意点と、その解析手法について実際の例を呈示しながら説明した。(共同報告者: <u>Sachiko Takagi</u>・Akihiro Tanaka; 共同研究につき本人担当部分抽出不可能)</p>
<p>(国内学会発表)</p> <p>1. 表情における情動認知について—「嫌悪」と「軽蔑」の視点から—</p> <p>2. 表情認知における文脈効果に関する一考察</p> <p>3. 表情による感情推定に関する一考察</p>	<p>単独</p> <p>単独</p> <p>単独</p>	<p>2002年9月26日</p> <p>2003年9月14日</p> <p>2004年9月12日</p>	<p>日本心理学会第66回大会(広島大学)</p> <p>日本心理学会第67回大会(東京大学)</p> <p>日本心理学会第68回大会(関西大学)</p>	<p>本研究の目的は、「嫌悪」と「軽蔑」の2つの感情について、1. 表情による情動判断の際に重要な表情要素、2. 誤答に結びつく表情要素、3. 表情強度の測定に重要な表情要素を検討することであった。実験では、嫌悪と軽蔑の表情の生成段階(5段階)の部分的な静止画を呈示し、感情種とその強度を測定した。実験の結果、顔の上部情報が2表情の判別に影響し、感情強度の判断には目と眉の情報が重要であることが示唆された。</p> <p>本研究の目的は、系列的文脈情報と並列的文脈情報がターゲットとなる表情の情動判断を行う際に与える影響を検討することであった。実験ではリアリティーのある刺激を呈示するため、表情刺激は視覚的に、文脈情報は聴覚的に呈示した。また、表情刺激はモーフィング技法を用いた動画と静止画を両方呈示した。実験の結果、動画の方が情動判断が正確になされ、聴覚情報による文脈が付加された場合には、感情の覚醒度の組み合わせが情動判断に影響を与えることが示唆された。</p> <p>本研究では、特定の文脈において変化する他者の表情を観察した場合に、それに応じた観察者の表情変化を検討した。実験では、抗議・謝罪・要求・質問の4つの文脈において、中立から怒り、怒りから喜び、喜びから中立へと変化する3種のCGアニメーション人物の動画刺激を呈示し、刺激観察中の被験者の表情を録画して分析した。実験の結果、表情が喜びに変化する場合には同調反応として喜び表情の表出が増え、怒りに変化する場合には説得反応として喜び表情の表出が増えることが示唆された。</p>

<p>4. 表情のモーフィング画像を用いた感情誘導に関する一考察</p>	<p>共同</p>	<p>2005年5月29日</p>	<p>日本認知心理学会第3回大会（金沢大学）</p>	<p>本研究では、表情を動画呈示することによる感情誘導法の有効性を、エモーショナル・ストループ課題を題材に検討することを目的とした。実験計画は、独立変数として表情動画の感情種（positive/negative/reverse①/reverse②）×エモーショナル・ストループの刺激種（positive語/negative語/無関連語）の2要因計画を用いた。実験の結果、恐怖表情を検出するのが初期か末期段階かが後続のエモーショナル・ストループ刺激の処理に影響を与える可能性が示唆された。（共同報告者：高木幸子・井出野尚；共同研究につき本人担当部分抽出不可能）</p>
<p>5. 表情のモーフィング画像が数字ストループ課題に及ぼす影響の検討</p>	<p>共同</p>	<p>2006年8月1日</p>	<p>日本認知心理学会第4回大会（中京大学）</p>	<p>本研究では、動画として呈示する表情が、数字ストループの課題成績にどのような影響を与えるかを検討することを目的とした。実験計画は、独立変数として表情動画の感情種（喜び/恐怖/reverse①/reverse②）×数字ストループの刺激種（一致/コントロール/不一致）の2要因計画を用いた。事件の結果、特にストループ刺激が一致条件の場合には、恐怖よりも喜びにおいて反応時間が長くなることが示された（共同報告者：高木幸子・井出野尚；共同研究につき本人担当部分抽出不可能）</p>
<p>6. 感情生起下の認知処理過程の検討</p>	<p>共同</p>	<p>2006年11月4日</p>	<p>日本心理学会第70回大会（九州大学）</p>	<p>本研究では、快感情あるいは不快感情生起時において、ヒューリスティクス型とコントロール型処理方略といった課題制御に関する特徴がどのような処理プロセスに基づくかを検討した。実験では、表情を用いた感情プライミングに続いて、数字ストループ課題とリーディングスパンテスト（RST）を実施した。実験の結果、快感情生起時のみ反応時間とRST得点に相関がみられ、快および不快感情生起時にはそれぞれ異なるリソースが用いられていることが明らかになった。（共同報告者：井出野尚・高木幸子；共同研究につき本人担当部分抽出不可能）</p>
<p>7. 対人場面における顔表情の役割</p>	<p>単独</p>	<p>2006年11月5日</p>	<p>日本心理学会第70回大会（九州大学）</p>	<p>本研究では、シナリオに沿ってCGアニメーション人物とコミュニケーションを行う実験を通して、表情による他者感情の推測を検討した。特に、相手の表情が予測と異なった場合の被験者の表情変化を検討した。実験の結果、一般的に被験者はシナリオのセリフが示す感情と一致した表情を生成するが、相手の表情が予測と異なった場合には喜び表情を返す傾向がみられた。また、他者感情の推測は、シナリオよりも表情を手がかりに行われていることが示唆された。</p>

8. 対話場面を中心としたコミュニケーションにおける表情の役割	単独	2007年9月20日	日本心理学会第71回大会（東洋大学）	本研究の目的は、実験者が表情をpositive/negativeに操作したCGアニメーションの人物と交渉して具体的な旅行プランを決定するという実験を通して、具体的な対話場面の意思決定における表情の影響を検討することであった。実験では、交渉の決定内容および経過について、意思疎通の程度および満足度を測定した。実験の結果、CG人物の表情がpositiveな場合に意思疎通の程度と満足度はともに高まるが、満足度については被験者本人が生成する表情の影響も重要であることが示唆された。
9. 視線検出過程に及ぼす表情の影響	共同	2007年9月20日	日本心理学会第71回大会（東洋大学）	本研究の目的は、他者の視線検出過程における注意の自動的なシフトに、表情種と課題難易度が及ぼす影響を検討することであった。また、リーディングスパンテスト(RST)を用い、注意の制御プロセスとワーキングメモリの中央実行系との関連を検討した。実験の結果、刺激間隔が長くなれば反応時間が短くなり、注意は表情そのものに対して喚起されたのちに、視線方向へシフトすることが示唆された。（共同報告者：井出野尚・高木幸子・高橋優・西本武彦；共同研究につき本人担当部分抽出不可能）
10. 対人不安が表情認知に及ぼす影響—就職面接場面における対人不安と表情認知の関係性—	単独	2008年9月20日	日本心理学会第72回大会（北海道大学）	本研究では、擬似就職面接場面において、採用者側の表情種の差・表情比率の推移・被験者の対人不安傾向が、採用者に対して与えた印象の自己評価および面接官の下す評価推測にどのような影響を与えるのかを検討した。採用者側の表情は志願者の自己評価に影響を与え、特に否定的表情は印象評価を大きく下げる傾向にあった。また、対人不安傾向によって判断には差がみられ、面接後半に採用者の否定的表情が多い場合にその差が顕著であった。
11. 採用面接場面における表情認知と対人不安の関係性	単独	2009年8月27日	日本心理学会第73回大会（立命館大学）	擬似的な採用面接場面を設定し、面接者の表情と志願者の対人不安傾向が、志願者自身による印象や採否見込みの判断に与える影響を検討した。結果として、対人不安傾向によって判断に差が生じ、対人不安が高い志願者は結果を否定的に予測し易く、採用者側の表情の捉え方が対人不安が低いものとは異なることが示唆された。特に、採用者が肯定的表情を多く表出し、良い印象を与えられたと判断しても、結果的には不採用になるという予測が多くみられた。

12. 採用面接場面における志願者への評価間一致度—表情と対人不安に着目して—	単独	2010年9月20日	日本心理学会第74回大会（大阪大学）	擬似的な採用面接場面を第三者が観察して志願者の印象と採用見込みを評価する際、第三者の評価に影響を与える要因とその一致度に関する実験的検討を行った。要因として、志願者の言語的回答内容、面接者の表情の種類を取り上げた。結果から、面接における志願者の言語的回答が大きな影響を与え、対人不安が高い志願者に対する評価の一致度は高いが、対人不安の低い志願者に対する評価の一致度は低いことが示唆された。
13. 感情を含んだ表情と音声を組み合わせた日蘭刺激作成とその評価	共同	2011年9月15日	日本心理学会第75回大会（日本大学）	感情の視聴覚統合について検討するため、日本人とオランダ人が顔と声で基本6感情を表現した動画による刺激セットを作成し、顔と声それぞれに関する評価実験を行った。評価実験については、日本人とオランダ人の感情知覚傾向に関する比較検討も実施した。分析結果から、日本人は恐怖表情を表情ではなく音声を手がかりに知覚する傾向があり、またオランダ人と比較して音声からの感情の読み取りに長けていることが示唆された。（共同報告者：高木幸子・平松沙織・田中章浩；共同研究につき本人担当部分抽出不可能）
14. 顔と声のあらかわす感情が不一致な刺激に対する感情判断および印象評定【再掲】	共同	2012年2月4日	日本音響学会聴覚研究会（那覇市IT創造館）	感情の視聴覚統合に焦点をあてた研究を行った。本研究では、人工的な刺激と非人工的な刺激から知覚される感情に着目して、刺激の生態学的妥当性を確認した上で、その傾向について検討した。結果、知覚される感情は、口の動きと発話のずれに注意して作成された人工的な刺激であれば概ね同様の傾向を持ち、非人工的な刺激を用いて得られた視聴覚統合に関する知見は有益であることが示唆された。（共同報告者：高木幸子・田部井賢一・田中章浩；共同研究につき本人担当部分抽出不可能）
15. 表情認知および音声感情認知における内集団優位性の文化間比較	共同	2012年6月28日	日本認知心理学会第10回大会（岡山大学）	本発表では、日本人とオランダ人の実験参加者に対して表情刺激および音声刺激を呈示する心理実験を行った結果得られた内集団優位性について論じた。実験には日蘭の大学生が参加し、それぞれの文化の表情及び音声刺激に対する感情判断を行った。通文化的に音声刺激における内集団優位性が高く、とりわけオランダ人参加者では内集団と外集団に対する判断に差が大きいことを述べた。（共同報告者：田中章浩・高木幸子・平松沙織；共同研究につき本人担当部分抽出不可能）

16. 表情と音声のあらかず感情が不一致な刺激に対する感情判断	共同	2012年9月13日	日本心理学会第76回大会（専修大学）	本研究の目的は、表情と音声異なる感情を示す刺激から読み取られる感情における日蘭文化差を検討することであった。実験の結果、日蘭で文化差がみられ、特に感情判断では一般的に視覚モダリティの情報が有意であるが、日本人は同一文化集団の感情判断では聴覚モダリティの影響も強く受けることが示された。また、表情と音声の示す感情が融合して他の感情として知覚される割合は、オランダ人よりも日本人で高かった。（共同報告者：高木幸子・田部井賢一・田中章浩；共同研究につき本人担当部分抽出不可能）
17. 表情と音声を入れ替えた刺激に対する感情判断—基本6感情を用いた日蘭比較—	共同	2012年9月13日	日本心理学会第76回大会（専修大学）	本研究では、表情と音声で異なる感情を示すように人工的に作成された刺激を用いて、他者感情の把握における多感覚情報の重みづけに関する文化差を系統的に検討した。感情は基本6感情のすべてを扱い、全36通りの組み合わせについて言及した。その結果、すべての感情の組合せの全体的傾向として、オランダ人と比較して日本人に音声知覚優位が、日本人と比較してオランダ人に表情知覚優位が示された。ただし、感情別の結果では感情価ごとに差が生じることが明らかになった。（共同報告者：田部井賢一・高木幸子・田中章浩；共同研究につき本人担当部分抽出不可能）
18. 表情と音声の情動価を不一致にした刺激に対する情動判断—基本6感情を用いた日蘭比較研究— 【再掲】	共同	2012年11月14日	電子情報通信学会HIP研究会（東北大学）	本研究では、視聴覚情動知覚について、モダリティ優位性の傾向に文化差がみられるのかを検討した。基本6感情を表現した動画をもとに、表出された表情と音声の情動価の組合せを入れ替えた刺激を用いた実験を行った。その結果、全体的傾向として、オランダ人と比較して日本人に音声知覚優位がみられ、日本人と比較してオランダ人に表情知覚優位が示された。また、特に視聴覚情報を同時呈示した場合には、情動の種類によって日蘭での回答傾向が顕著に異なることが示された。（共同報告者：田部井賢一・高木幸子・田中章浩；共同研究につき本人担当部分抽出不可能）

19. 表情と音声の示す感情が異なる刺激に対する感情判断—同一文化集団と異文化集団の刺激における判断の日蘭比較—	共同	2012年12月13日	日本認知科学会第29回大会（東北大学）	本研究の目的は、演技の段階で表情と音声に意図せずに不一致な感情が表出された刺激から知覚される感情について日蘭比較をおこなうことであった。実験の結果、日蘭で文化差がみられることが明らかになった。特に感情判断では一般的に視覚モダリティの情報が優位であるが、日本人では同一文化集団の感情判断では聴覚モダリティの影響も強く受けることが示された。（共同報告者：高木幸子・田部井賢一・Huis In' t Veld Lisanne・de Gelder Beatrice・田中章浩；共同研究につき本人担当部分抽出不可能）
20. 基本6感情を表出した表情と音声に対する感情判断—表情と音声を入れ替えた刺激に対する判断の日蘭比較—	共同	2012年12月14日	日本認知科学会第29回大会（東北大学）	本研究では、基本6感情を表現した動画をもとに、表出された表情と音声の感情価の組合せを入れ替えた刺激を作成して、多感覚情報の重みづけにおける文化差を系統的に検討した。その結果、すべての感情の組合せの全体的傾向として、オランダ人と比較すると日本人に音声知覚優位がみられ、日本人と比較してオランダ人に表情知覚優位が示された。さらに、感情別に集計した結果では、感情価ごとに文化差が生じることが明らかになった。（共同報告者：田部井賢一・高木幸子・Huis In' t Veld Lisanne・de Gelder Beatrice・田中章浩；共同研究につき本人担当部分抽出不可能）
21. 基本6感情の組合せによる高次感情の検討【再掲】	共同	2013年3月4日	電子情報通信学会HCS研究会（山代温泉）	本研究では、複雑な高次感情について概念構造と、認知および表出の2つの側面から検討を行った。研究1では質問紙を用い、高次感情にどの程度基本6感情が含まれているかを、それぞれ7段階で回答させた。研究2では参加者は、基本6感情を表現した表情と音声を組み合わせ、指定された感情を最も適切に表現する発話動画を作成することを求められた。本研究の結果は、少なくとも一部の高次感情は、基本6感情の組み合わせから説明されることを明らかにした。（共同報告者：宮澤史穂・高木幸子・田中章浩；共同研究につき本人担当部分抽出不可能）

22. 顔と声による高次感情の表現における文化差	共同	2013年6月30日	日本認知心理学会第11回大会（筑波大学）	本研究では、日本人とオランダ人を対象とし、軽蔑や嫉妬といった高次感情の多感覚的表現とその文化差を明らかにすることを目的に、顔と声を組み合わせて高次感情を表す視聴覚動画を作成する実験をおこなった。結果を日蘭で比較したところ、高次感情の通文化的側面と文化依存的側面の両方が示された。前者は、興味は驚き表現と類似性が高いという点であった。また、後者は、軽蔑と嫉妬は、日本人では怒りと、オランダ人では喜びと表現の類似性が高いという点であった。（共同報告者：高木幸子・宮澤史穂・Elisabeth Huis in 't Veld・Beatrice de Gelder・田中章浩；共同研究につき本人担当部分抽出不可能）
23. 発話内容の理解における発話者の表情の影響 【再掲】	共同	2013年7月14日	電子情報通信学会HIP研究会（新潟国際情報大学）	本研究では発話者の表情が観察者の発話内容の理解に及ぼす影響を検討した。18名の参加者を対象に、発話者が怒り顔、喜び顔、中立顔で200字程度の説明的文章を読み上げている映像と音声を呈示した。動画呈示後の観察者の主観的な理解度評定と、発話内容についての理解成績を検討した結果、発話者が怒り顔である場合には、その他の表情よりも主観的な理解度が低下するが、実際の理解成績には差がないことが示された。また、観察者の眼球運動の分析では、どの表情においても発話者の口よりも目への注視が多かった。（共同報告者：高橋 麻衣子・高木幸子・田中章浩；共同研究につき本人担当部分抽出不可能）
24. 上下回転した未知人物顔の同定	共同	2014年6月29日	日本認知心理学会第12回大会（東北大学）	顔処理においては一般的に、目や鼻といったパーツ自体を処理する部分処理よりも、その位置関係を処理する全体処理が優位とされている。本研究では、顔を上下の角度から観察した場合にはどちらの処理が優位になるかを検討した。実験では、正面顔に続き、上下7段階から撮影し、かつ顔のパーツを変形させた写真を呈示する方法で、再認課題を実施した。実験の結果、上下の角度から顔を観察し、再認処理をおこなう際には、全体処理ではなく、部分処理が優位であることが示唆された。（共同報告者：平賀茉莉・安田孝・高木幸子・田中章浩；共同研究につき本人担当部分抽出不可能）

25. 高次感情の概念と表出および知覚の関連性の検討	共同	2014年6月29日	日本認知心理学会第12回大会（東北大学）	本研究では、恥や嫉妬といった高次感情の概念構造と、その表出および知覚の関連性について、1つの質問紙調査と2つの実験を用いて検討した。調査では高次感情に含まれる基本6感情の割合の回答を求め、その結果を感情表出実験および知覚実験の結果と比較検討した。結果として、一部の高次感情は喜びや怒りなどの基本感情の組み合わせで構成され、概念と表出には類似性がある一方で、特定の高次感情を表す表情と音声の組み合わせは表出と知覚で異なり、表出と知覚は必ずしも一致しない可能性が示唆された。共同報告者：高木幸子・宮澤史穂・田中章浩；共同研究につき本人担当部分抽出不可能)
26. 楕円の内部要素の傾きが外部要素の傾き知覚に及ぼす影響	共同	2014年9月12日	日本心理学会第78回大会（同志社大学）	本研究では、楕円の内部要素を傾けることによって、楕円の輪郭そのものが傾いて知覚される錯視現象を検討した。内部要素として顔とそれ以外を取り上げ、この錯視現象に及ぼす顔の特異性の影響も合わせて検討した。恒常法を用いた実験の結果、内部要素の傾きに応じて楕円の輪郭も傾いて知覚され、顔の場合にその傾向がより顕著であることが示唆された。これは、両眉と鼻で構成されるT字成分の傾きが楕円の長軸と短軸の傾き知覚に影響を及ぼすためと考えられる。（共同報告者：高木幸子・安田孝；共同研究につき本人担当部分抽出不可能)
27. How to コミュニケーション研究—顔と声を用いた認知的研究の動向とノウハウをつかむ—	共同	2015年7月5日	日本認知心理学会第13回大会（東京大学本郷キャンパス）	コミュニケーションを検討するにあたり、顔や声を対象とした認知的研究は盛んにおこなわれているが、研究上のノウハウや利用可能な刺激セットに関する情報は研究者間で共有されているとは言い難く、誰もがアクセスしやすい状況にはない。本発表では刺激セットに焦点を当て、1)使用事例、2)種類、3)作成方法という3つの視点からこうした領域の研究のノウハウや注意事項を共有することを目指した。発表はワークショップ形式でおこない、企画・司会・発表を担当した。（共同報告者：高木幸子・高橋翠）

28. 顔と声による情動判断における文化差を生み出す神経基盤 【再掲】	共同	2015年7月18日	電子情報通信学会HIP研究会（九州産業大学）	本研究の目的は、動画刺激を日本実験参加者とオランダ人実験参加者に視聴覚呈示して情動判断時の脳活動をfMRIで計測する実験を実施し、視聴覚情動判断の際の神経基盤での文化差を検討することであった。行動データでは、オランダ人は日本人と比べて顔への依存性が高いという文化差がみられた。脳画像データでは、日本人よりもオランダ人では顔への依存性が高いという傾向はRt FFAと、ACCといった高次処理を担う領域の活動の差から生じる可能性が示唆された。（共同報告者：高木幸子・原田宗子・定藤規弘・Huis In 't Veld Elisabeth・de Gelder Beatrice・濱野友希・田部井賢一・田中章浩；共同研究につき本人担当部分抽出不可能）
29. 会話の理解を促進する表情と注視位置の検討 【再掲】	共同	2015年7月18日	電子情報通信学会HIP研究会（九州産業大学）	本研究では、対面での会話時の内容理解における発話者の表情と観察者の視線の影響を検討した。実験では発話者が短い説明的文章を怒り・喜び・中立の表情で読み上げる動画を呈示し、参加者には顔全体を見る条件・目元を注視する条件・口元を注視する条件で発話内容を理解するように求めた。その結果、発話者が喜び顔でかつ観察者が口元を注視した場合に文章理解が促進された。音声のみを呈示した場合には、音声に含まれる感情は理解に影響しなかった。（共同報告者：高橋麻衣子・高木幸子・田中章浩；共同研究につき本人担当部分抽出不可能）
30. 表情と音声による高次感情表現に対する印象判断	共同	2015年9月24日	日本心理学会第79回大会（名古屋国際会議場）	本発表では、ある社会的文脈において同じセリフににもかかわらずポジティブな高次感情とネガティブな高次感情を表現した視聴覚感情表現を刺激として呈示した実験を行い、表情と音声による高次感情情報の相互作用が、受け手に最終的に与える印象について論じた。（共同報告者：高木幸子・田中章浩；共同研究につき本人担当部分抽出不可能）
31. 社会的文脈に応じた表情と音声による感情表現とその評価	共同	2015年10月31日	日本社会心理学会第56回大会（東京女子大学）	本発表では、表情と音声による感情表現からどのような感情が判断されるかにおいて、背景状況としての社会的文脈が及ぼす影響について心理学実験を通じて論じた。本知見によって、社会的文脈の示す感情と、実際に表情や音声によって表出された感情との相互作用の影響について新たな視点が示された。（共同報告者：高木幸子・田中章浩；共同研究につき本人担当部分抽出不可能）

32. 楕円の外部要素の傾き知覚に内部要素の傾きが及ぼす影響	共同	2016年6月18日	日本認知心理学会第14回大会（広島大学）	本発表では、楕円の内部要素を傾けることによって楕円の輪郭そのものが傾いて知覚される錯視現象を扱い、この錯視現象に及ぼす顔の特異性の影響について、楕円内部の画像を顔及びそれ以外として楕円を傾けてその傾きの程度を判断させる心理実験の結果について論じた。（共同報告者：高木幸子・安田孝；共同研究につき本人担当部分抽出不可能）
33. 社会的文脈に沿った表情と音声による感情表現とその評価 【再掲】	共同	2017年3月15日	電子情報通信学会HCS研究会（東北大学）	本研究では、高次感情と社会的文脈に焦点を当て、表情と音声の示す感情情報の快の程度の差が、最終的な送り手の感情状態の快度判断および受け手に対する好意度判断に及ぼす相互的な影響を検討した。実験の結果、送り手の快度および好意度は、表情単独からは判断できないものの、音声単独からは判断できることが示された。また、相互の影響は加算的に影響しあうことが明らかになった。（共同報告者：高木幸子・田中章浩；共同研究につき本人担当部分抽出不可能）
34. 氏に対する親密度が互恵的行動に及ぼす影響	単独	2017年9月20日	日本心理学会第81回大会（久留米大学）	本発表では、夫婦別姓制度を視野に、最後通牒ゲームを用いた実験を行い、氏への親密度が対人関係における互恵行動の増減に及ぼす影響について論じた。実験の結果、氏の同異によって最後通牒ゲームにおける分配金受け入れの傾向には差がみられず、つまり氏の性質によって互恵的行動には増減がみられないことが明らかになった。
35. 共感性が表情と音声による高次感情判断に及ぼす影響 【再掲】	単独	2017年10月27日	電子情報通信学会HCS研究会（東広島芸術文化ホールくらら）	本研究の目的は、送り手によって表情と音声で一致あるいは不一致な高次感情情報が表出された場合に、受け手による感情判断と受け手自身の感情的反応に、受け手の共感性が及ぼす影響を、実験によって検討することであった。実験の結果、表情と音声による高次感情表現に基づく感情判断は、受け手の個人内要因である共感性のうち視点取得と被影響性の程度によって差がみられる可能性が示唆された。

<p>36. 人物の印象形成に顔と声が及ぼす影響—既存情報の印象に基づく未知情報の具体的推測— 【再掲】</p>	<p>共同</p>	<p>2018年3月13日</p>	<p>電子情報通信学会 HCS研究会（東北大学）</p>	<p>本研究の目的は、特定人物の顔と声という既存手がかり情報から形成された印象に基づいて、その人物に関する未知情報を推測する場合、推測内容が評価間で一致する傾向および各既存手がかり情報の重みづけの2点について実験的に検証することであった。実験結果から、推測内容は評価者間で一致する傾向が高く、顔もしくは声どちらか一方の印象に依拠して推測がなされるという知見が得られた。（共同報告者：渡辺風沙・高木幸子；共同研究につき本人担当部分抽出不可能）</p>
<p>37. 日本語修辭疑問文における対格WH語の指示性—統語構造に基づく韻律構造の予測— 【再掲】</p>	<p>共同</p>	<p>2018年3月13日</p>	<p>電子情報通信学会 HCS研究会（東北大学）</p>	<p>本研究は心理学と言語学の共同研究である。言語学における議論から、対格WH語の「何を」を伴う修辭疑問文では、当該WH語の指示的解釈と非指示的解釈の間で意味解釈上の曖昧性が観察される。本稿では、これら2つの解釈を統語構造から概観し、これに基づく韻律構造に関する予測を立てた。本研究を通じて、日本語では文末イントネーション以外の音声情報が統語構造の識別に関与するということが明らかになった。（共同報告者：坂本暁彦・高木幸子；共同研究につき本人担当部分抽出不可能）</p>
<p>38. 日本語修辭疑問文における対格WH語の指示性—音声聴取実験による二種類の統語構造の検証— 【再掲】</p>	<p>共同</p>	<p>2018年5月21日</p>	<p>電子情報通信学会 HCS研究会（沖縄産業支援センター）</p>	<p>本稿は、心理学と言語学の共同研究である。対格WH語を伴う疑問文における2種類の意味解釈について、言語学領域における統語構造から韻律構造を予測し、この予測に関して内省判断と心理実験による量的判断からアプローチした。実験では、予測を踏襲した音声を収録して呈示し、当該の予測が量的にも妥当であることが示された。（共同報告者：高木幸子・坂本暁彦；共同研究につき本人担当部分抽出不可能）</p>
<p>39. アクセント位置が非難解釈に及ぼす影響</p>	<p>共同</p>	<p>2018年9月27日</p>	<p>日本心理学会第82回大会（立命館大学）</p>	<p>「何を」という対格WH語を伴う言語形式には、発話時に聞き手を非難する解釈が生じるとされ、行為の対象物を問題にするか否かでその解釈は少なくとも二通りある。坂本・高木（2018）はこの点に関し、統語構造から韻律構造を予測し、この予測の妥当性に関して質的検証を行った。本発表では、これについて心理実験を通じて量的なレベルからも検証した。（共同報告者：高木幸子・坂本暁彦；共同報告につき本人担当部分抽出不可能）</p>

40. 意外性に関わる言語形式と心理学における感情研究	共同	2018年12月1日	日本英文学会東北支部第73回大会シンポジウム『語用論と他分野のインターフェースー言語学内外での語用論の可能性を探るー』（山形大学）	言語学領域において、情報源を言語的に標示する証拠性マーカーの存在が以前から知られているが、それにまつわる研究を背景として意外性（mirativity）という意味カテゴリーの存在が指摘されている。本発表では、心理学において蓄積されてきた感情研究の知見から意外性に関わる言語形式へとアプローチし、意外性を定義するに際しての新たな知見を提供した。（共同報告者：高木幸子・坂本暁彦；共同報告につき本人担当部分抽出不可能）
41. スマートスピーカーによるフィラーとポーズを伴う返答に対するアニマシー知覚 【再掲】	共同	2019年3月8日	電子情報通信学会HCS研究会（北星学園大学）	本研究は、AIの返答を操作し、返答における挿入内容（フィラー・ポーズ）、およびそれらの挿入頻度（複数・単数）が、ヒトがスマートスピーカーに対して抱くアニマシーや利便性、会話の自然さに与える影響を検討することを目的とした。実験の結果、他の条件と比較して、AIの返答に単数回のフィラーを挿入することはアニマシー知覚を増加させるものの、利便性や会話の自然さの評価を減少させることが明らかになった。一方、フィラーを複数回挿入した場合には、すべての指標において評価が減少することが示唆された。（共同報告者：檜山貴義・高木幸子・坂本暁彦；共同研究につき本人担当部分抽出不可能）
42. 韻律と視線が指示性解釈に及ぼす影響ー対格WH語を伴う日本語修辞疑問文を用いた検討ー 【再掲】	共同	2019年5月17日	電子情報通信学会HCS研究会（沖縄産業支援センター）	対格WH語を伴う修辞疑問文では、その韻律構造において、非難の焦点が対象物へと向かう指示的解釈ではWH語に、非難の焦点が行為そのものへと向かう非指示的解釈では動詞に強調アクセントが置かれる。本研究ではさらに、上記の統語・韻律構造から導かれる音声情報と視線を同時呈示した場合の、聞き手による指示性解釈の変化を実験によって検証した。実験結果は、一般的には視覚情報の方が判断において優位とされるものの、指示性解釈の場合には音声情報が重要であった。（共同報告者：高木幸子・坂本暁彦；共同研究につき本人担当部分抽出不可能）
43. 韻律と視線が非難の焦点の解釈に及ぼす影響	共同	2019年9月6日	日本認知科学会第36回大会（静岡大学）	本研究では、対格WH語を伴う修辞疑問文発話時の音声情報と視線情報を実験参加者に同時呈示して、非難の対象に関する判断を求めることによって、こうした判断における各情報の重みづけについて検討を行った。実験の結果、各情報の非難の対象が明確な場合には音声情報と視線情報の重みづけには差がないものの、曖昧な場合には重みづけの個人差がみられ、特に音声情報を重視する傾向が強いことが示唆された。（共同報告者：高木幸子・坂本暁彦；共同研究につき本人担当部分抽出不可能）

44. 求心顔および遠心顔が男性の顔印象に及ぼす影響	共同	2019年9月12日	日本心理学会第83回大会（立命館大学）	本研究では、女性メイク顔において示唆されている求心顔（各パーツが中央に寄って布置されている）および遠心顔（各パーツが中央から離れて布置されている）が与える印象が男性メイク顔でも同様に生じるかどうかを検討した。実験においては、実際にメイクを施して作りだされた11名の求心顔・ノーマル顔・遠心顔を刺激として呈示し、実験参加者に評価を求めた。実験の結果、主に穏やかな印象を与えるという遠心顔の効果は確認されたものの、知的で大人っぽい印象を与えるという求心顔の効果は確認されなかった。この結果は、顔におけるパーツ布置の印象効果には性差があることを示唆している。（共同報告者：高木幸子・安田孝；共同研究につき本人担当部分抽出不可能）
45 LINEスタンプがもたらす感情伝達促進効果がチャットコミュニケーションに与える影響【再掲】	共同	2020年3月4日	電子情報通信学会HCS研究会（オンライン開催）	本研究は、チャット場面における感情伝達で、エモティコンの種類（顔文字、絵文字、LINEスタンプ）による伝達効果の差異を検証することを目的とした。伝達する感情は喜び、悲しみ、怒り、不安の4つを設定した。分析の結果、エモティコンの付加が、メッセージの感情伝達を促進することが示された。また、喜びと怒りの感情では、LINEスタンプは顔文字や絵文字に比べてより促進するという、エモティコンによる効果の差異が示唆された。（共同報告者：安田孝・高木幸子；共同研究につき本人担当部分抽出不可能）
46 ナント型感嘆文 — 不変化詞「の」の生起に関する質的・量的検証 — 【再掲】	共同	2020年5月14日	電子情報通信学会HCS研究会（オンライン開催）	名詞要素が現れるタイプのナント型感嘆文（以下、名詞タイプ）では、不変化詞「の」の生起が随意的であることが指摘されている（例えば、「なんて論文（なの）だ」）。統語論を背景とした研究では、一般に、節を名詞化する要素という意味で「の」が名詞化辞とされる。名詞化辞分析のもとでは、随意的とは言え、「の」がなぜ生起可能なのかについては不明なままである。一方で、不変化詞「の」をある種のモダリティ要素として見なす意味・語用論的な研究として五十嵐（2015）があるが、そこでは「の」が意外性マーカーとして分析されている。本研究では、この意外性分析に沿って、名詞タイプにおける「の」の生起に関して実験と調査に基づき説明した。（共同報告者：坂本暁彦・高木幸子；共同研究につき本人担当部分抽出不可能）

47 職場におけるフリーライダー問題 —初対面時の印象とその判断—【再掲】	共同	2021年3月1日	電子情報通信学会 ヒューマンコミュニケーション基礎研究会(HCS)、オンライン	本研究では、職場におけるフリーライダーに焦点を当てた。具体的には、日常的な会話からフリーライダーを見抜くことはできるのか、フリーライダーの存在および自身のフリーライダー傾向が共同作業におけるメンバー選択にどのような影響を及ぼすのかを検討した。(共同報告者：小松崎航・高木彩子；共同研究につき本人担当部分抽出不可能)
48 オンライン採用面接における自己像が志願者に及ぼす影響の予備的検討【再掲】	共同	2021年5月1日	電子情報通信学会 ヒューマンコミュニケーション基礎研究会(HCS)、オンライン	本研究は、オンライン採用面接において、画面に表示される志願者自身の顔(自己像)が、志願者自身にどのような影響を及ぼすか、検討することを目的として、その予備的検討を行う。実験では、実験参加者が志願者、実験者が面接官になり、模擬的なオンライン採用面接を実施する。その際、自己像のフィードバックの有無を要因として、(1)自己フィードバックなし条件、(2)自己フィードバックあり・サイズ小条件、(3)自己フィードバックあり・サイズ大条件、の3条件を設定する。実験後に実験参加者に質問紙への記入を求め、自己像の有無によって実験参加者の面接に対する自己評価などにどのような影響を及ぼすか、検討した。(共同報告者：高木 幸子・伊藤 博晃・安田 孝・渡邊 伸行；共同研究につき本人担当部分抽出不可能)
49 衛生マスクとサングラスの着用が顔の魅力度の推測に及ぼす影響【再掲】	共同	2022年3月1日	電子情報通信学会 ヒューマンコミュニケーション基礎研究会(HCS)、オンライン	本研究の目的は、マスクによって顔の口元情報が隠れている場合と、サングラスによって顔の目元情報が隠れている場合に予測される顔の魅力度は、もともとの顔の魅力度と比較してどのように変化するのかを検討することであった。実験では、男女各4名(計8名)のオリジナル顔画像と、オリジナル顔画像からマスクで口元を隠した画像と、サングラスで目元を隠した画像を作成して刺激として実験参加者に呈示し、単項目5件法で顔の魅力度について回答することを求めた。得られたデータに関して2要因(第1要因：モデルの性別(男性・女性)；第2要因：条件(マスク条件・サングラス条件・オリジナル条件))の分散分析を実施した。分析の結果、男性モデルの場合のみ、サングラス条件およびオリジナル条件と比較して、マスク条件において推測される魅力度が高いことが示された。この結果から、男性の場合のみ、マスクを外した場合とサングラスをしている場合よりもマスクを着用している場合の方が顔の魅力が高く評価されることが示された。(共同報告者：杉本浩一・安田孝・高木 幸子；共同研究につき本人担当部分抽出不可能)

50 オンライン採用面接における発話内容と人事評価に関するテキストマイニングを用いた検討（再掲）	共同	2022年5月15日	電子情報通信学会ヒューマンコミュニケーション基礎5月研究会（オンライン）	本研究では、オンライン採用面接において志願者が表出する様々な情報のうち発話内容に着目し、人事評価の高低に基づくそれぞれの発話内容の特徴についてテキストマイニングを通じて検討した。テキストマイニングの結果得られた頻出語リストおよび共起ネットワークから、高評価者と比較して低評価者は、質問に対する回答において抽象的な語とフィラーの頻出度が高く、これによって発話内容が具体性に欠ける傾向にあることが示唆された。（共同：高木幸子・伊藤博晃・安田孝・渡邊伸行；共同研究につき本人担当部分抽出不可能）
51 オンライン面接における評価の諸側面	共同	2022年8月31日	日本行動計量学会第50回大会（オンライン）	2020年から始まったコロナ禍により、われわれの生活様式は大きく変容し、採用活動における面接も直接的な対面形式からオンライン上での間接的な対面形式へと移行した。本発表ではオンライン面接に焦点を当て、面接者と志願者のリアルタイムでのやり取りにおいて表出される数々の情報が、採用／不採用にまつわる評価にどのような影響を与えるのかについて検討する。発表では、高評価者と低評価者の表出した言語情報の比較を中心に、その他の要因の影響も併せて考察を行った。（共同：高木幸子・伊藤博晃・安田孝・渡邊伸行；共同研究につき本人担当部分抽出不可能）
52 ナント型感嘆文ー不変化詞「の」の有無が快度評価に与える影響ー（再掲）	共同	2023年1月22日	電子情報通信学会ヒューマンコミュニケーション基礎1月研究会（オンライン）	驚き感情の表出に特化した日本語表現の一つにナント型感嘆文がある。当該表現の名詞タイプでは、不変化詞「の」の生起が随意的となることが指摘されている。坂本・高木（2020）では、五十嵐（2015）で提案された意外性分析に基づき、名詞タイプに「の」が生起する場合、話し手による意外性判断を伴った驚き感情が表出されるという仮説を立て、文脈を固定せず「の」の生起の有無のみ焦点を当てた実験によりそれを検証した。本研究ではさらに、文脈を固定し、かつ、「の」の生起の有無が異なる刺激文を対呈示する発話文解釈調査を通して当該仮説の妥当性を検証した。（共同：坂本暁彦・高木幸子；共同研究につき本人担当部分抽出不可能）
(演奏会・展覧会等) 1.				
(招待講演・基調講演) 1.				
(受賞(学術賞等)) 1.				

研 究 活 動 項 目						
助成を受けた研究等の名称	代表、 分担等 の別	種 類	採択年度	交付・ 受入元	交付・ 受入額	概 要
(科学研究費採択) 1. 他者の共感を引き出す感情表出の特徴の解明：表情と音声を用いた視聴覚感情表出の検討 課題番号：26870608	代表	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）若手研究（B）	2014年度	独立行政法人日本学術振興会	3、120千円（直接経費：2、400千円、間接経費：720千円）	本研究では、顔、声、および顔と声の相互作用に焦点を当て、3つの事件を通じて共感性と互恵的行動の生起にこれらの要因が及ぼす影響について検討した。実験1では、共感を高める要因として氏の類似性を取り上げ、顔と氏の対を刺激として最後通告ゲームを行った。実験2では音声聴取実験を行い、非難表出におけるアクセント位置が感情理解に及ぼす影響を検討した。実験3では、社会的文脈が顔と声による感情判断に及ぼす影響を検討した。実験1から、氏という個人情報類似性が他者への援助行動に及ぼす影響はみられなかった。実験2と3から、他者の言動の対象を含む高次感情の判断では、顔よりも声が重要な役割を担うことが示された。
2. 意図および感情の理解における視聴覚相互作用：WH語を含んだ表現を用いた学際的検討 課題番号：20K12575	代表	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）	2020年度	独立行政法人日本学術振興会	3、770千円（直接経費：2、900千円、間接経費：870千円）	「何を食べてるの」、このたった一言だけでも解釈は多様である。純粋に情報を引き出すための質問なのか、相手の行為に対する非難なのか、後者の場合には食べ物に焦点を当てた非難なのか、食事行為そのものに焦点を当てた非難なのか、我々人間はこうした解釈の違いを瞬時に読み取り、コミュニケーションを行っている。解釈の違いをもたらす要因は、表情・言い方・視線・言語内容など多岐にわたる。本研究では、上記のようなWH語を含んだ日英語における発話表現を分析の対象とする。発話者の意図や感情を聞き手が解釈する場合、非言語的情報（発話における抑揚などの聴覚情報・視線や表情などの視覚情報）と言語的情報（発話の命題内容や推論から得られる意味）がどう影響し合うのか、そのメカニズムを文化比較的観点から解明し、各情報の重みづけに関するモデル構築を行うことが本研究課題の目的である。

(競争的研究助成費獲得(科研費除く)) 1. 表情と音声による感情の表現と解釈における文化差の解明	代表	日本私立学校振興・共済事業団学術研究振興資金 (若手研究者奨励金)	2014年度	日本私立学校振興・共済事業団	300千円	本研究では、表情と音声によって示される感情情報に焦点を当て、感情の表現と解釈の双方における文化差を明らかにすることを目的とした。本研究には、三つの特色があった。それらは、表情と音声という視覚および聴覚の影響を同時に扱い、複数の感覚情報の統合とその文化差を検討する点、一つの感情表現は単一ではなく複数の感情から構成されると仮定する点、得られた知見の応用可能性を高めることを目的に実践的な社会的文脈に焦点を当てた検討をおこなう点であった。研究の結果から、特に、軽蔑の感情表現においては、日本人は不快感情を用いるものの、オランダ人は快感感情を用いるといった文化差があることが明らかとなった。
(共同研究・受託研究受入れ) 1.						
(奨学・指定寄付金受入れ) 1.						
(学内課題研究(共同研究)) 1.						
(学内課題研究(各個研究)) 1. 姓の同異と家族の絆の関連性：選択的夫婦別姓制度をめぐる社会心理学的検討	代表	学内特別奨励研究	2018年度	常磐大学	251千円	本研究は、女性の社会進出を阻む要因の一つに挙げられる選択的夫婦別姓制度導入の是非という社会的問題に対し、心理学的かつ科学的にアプローチすることを目的としたものである。具体的には、1989年から2019年現在までの新聞の投書欄における夫婦別姓制度導入に関する220の記事を集め、KH Coderを用いたテキストマイニングを実施することによって、時期ごとの意見の変遷を検討した。本研究から、夫婦別姓問題に関する一般意見は新聞報道のニューズフレームの影響を色濃く受けていること、従来のリベラル対保守という構図から民法750条の違憲/合憲および国際結婚との関連を含めた議論へと発展していることが明らかになった。
(知的財産(特許・実用新案等)) 1.						